

『南島説話生成の研究——ユタ・英雄・祭儀』

福田 晃

著者の山下欣一氏は、昭和五二年（一九七七）に『奄美のシャーマニズム』（弘文堂）、

昭和五四年（一九七九）に『奄美説話の研究』（法政大学出版局）の大著を刊行されてい

る。それは、奄美諸島におけるシャーマン・ユタの生態を克明に考究されたものであり、

そのシャーマン・ユタの唱誦する説話の数々を大系的に分析されたものであった。そして

この両書の刊行は、文化人類学・民俗学のみならず、民間芸学や国文学の学界にも、大きな反響をもたらしたものである。本書は、

その既刊に続く第三の大著であるが、それは対象の地域を奄美から沖縄を含む南島に拡大し、そのシマジマに伝承されるハナシ（説話）が、ユタの活動などに支えられたシマ社会のなかで、現在性をもつて生成される実態を究明したものと言える。

まず本書の構成をあげると次のようである。

第一章 南島民間説話研究の歩み——比較 第一章 南島民間説話研究の歩み——比較

研究の予察——

第二章 奄美大島南部における説話群の生成と様態

第三章 奄美・徳之島伊仙台地における説話群の生成と様態

第四章 奄美・沖永良部島における「世之主」説話群の生成と様態

第五章 奄美・与論島における「英雄」説話群の生成と様態

第六章 沖縄・北中城村「喜舎場子」説話群の生成と様態

第七章 「死」をめぐる説話群——南島を視座にして——

第八章 祭儀をめぐる説話群——南島を視座にして——

第九章 八重山諸島竹富島「根原金殿」説話の生成と様態

第十章 終章

第一章 南島民間説話研究の歩み——比較 第一章 南島民間説話研究の歩み——比較

第三章は、奄美・徳之島伊仙台地の自然条件にもとづく各聖地の説話群をあげ、特に上

括的に論じた章を掲げ、以下、一九八五年から一九九七年までのおよそ十二年間にわたって実地踏査を重ね、随次、公表されてきた論文を北は奄美大島から南は八重山・竹富島に及んで配列し、その補足的な終章をもつて、南島におけるシマ説話生成のメカニズムを大系的に論究しようとするものである。

まず第一章は、南島における民間説話収集の進展を踏まえ、その伝承圈が朝鮮民族・漢民族と平行関係を有するものであるとし、具体的に「日光感精説話」「ミルクとサーカ」「猿の生肝」「兄弟の仲直り」を取りあげ、その比較を試みていて。しかしてその普遍とともに抽出される特殊の状況は、それぞれの説話をとりまく社会的・文化的背景から考究する必要性が要求されると説く。

第二章は、奄美大島南部の宇検村阿室及び瀬戸内町実久の地域社会の状況を踏査し、「阿室殿の娘」「実久殿の嫁」にかかる不思議な話が、ユタと深くかかわって生成されていることを明らかめ、「ユタは現在という時間性を軸に過去や他界を逆転させて、現在において話を生成させる」と説く。

面縄の英雄・ミナデウンノウ、大田布のミヨ
ウガン按司の娘・コイチヤンノロ、伊仙のミ
ンツキ田袋のテンチュアモレ（天人女房）の
伝承を支える筋と聖的空間を踏査し、その
なかでユタという靈的職能者の介在によって、
それぞれの説話が活性化される、その伝承の
ダイナミズムを明らかめる。

第四章は、奄美・沖永良部島に伝えられる悲劇の英雄「世之主」説話を取り上げる。それは琉球・北山王とつながる世之主二代にわたる悲劇の伝承であるが、それを伝える各地の世之主祭祀は、ユタの判断にもとづくものであったことを踏査し、また世之主とつながる筋における死靈祭祀には、これを司祭するユタの呪詞として、その伝承が唱誦される実態を明らかめる。さらに、「世之主」関連の諸文献を検討し、輻輳する「世之主」説話群によって深化してきた状況を究明する。

つまりそれは、悲劇の英雄説話が、ユタと深くかかわって、そのシマ社会のなかで、異なるものとして内実化してゆく生成過程を抉り出すものである。

第五章は、奄美・与論島に伝えられる三つの英雄説話をとりあげる。その第一は、「按

司ニッチュー」の伝説で、これを祭祀する朝戸の一家が、高名なヤブ（靈能者）の指示にしたがつて、その子孫であることを自覚し、自らの生活体験のなかでニッチュー説話を再びしてゆく状況を明らかめる。その第二は、「ウブドー・ナター」の伝説で、その子孫としてナターを祭る朝戸の一家が、たまたま来訪した名瀬市のユタの遺品発見によって、その伝説を真実なるものとして語り継ぐメカニズムを明らかめる。その第三は、「サービー・マートトイ」の伝説で、これを先祖として祀る茶家のN家が、ことある毎にヤブーの指示にしたがい、その祭祀をあらため、その遺品をたよりとして、新たに伝説を生成する過程を明らかめる。

第七章は、南島における祭儀とめぐる説話を二つ取りあげて論究する。すなわち前者に

おいては、沖縄本島知念村安座真に伝承される巨人神ウフジチューとその祭儀ウフジチューのかかわりを説き、大辜丸の所有者とされるウフジチューの原像が、ウミンチユウ（海人）の信仰する海神であり、それが安座真の伝承と祭儀に投影していると推考する。そして後者においては、八重山・石垣島川平に伝承されるマエンガナシ來訪譚と当地における節祭のかかわりを説き、それが川平の中心的御嶽としての群星御嶽と宗家である南風原屋へ収斂していることを明らかめ「民俗社会における信仰体系を支持していくのは、儀礼と相関して機能していく由来譚——説話群であり、むしろ由来譚の強調によつて儀礼

の伝承がなされるようになつていく」と説く。要求されるものであった。また各章の論述は、と思われる。言うまでもなく、ユタの活動は第九章は、八重山・竹富島における六御嶽の中心となる波座間御嶽の祭神・根原金殿にかかわる説話の生成を論究する。その根原金殿は、農業神として「粟の主」とも考えられているが、金殿と称されるごとく鍛冶神と推され、いわゆる鉄人童子の説話を有している。

しかしてその鉄人童子譚は、波座間御嶽を祀るトヌイムト（祭神直系の元屋）の根原家に生じた事件を契機に、ユタの託宣を通して再生成され、ユタの教示によつて伝承が確認されるという、説話生成のダイナミズムを明らめる。

第十章は、第一章から第九章に及んだ論考を補促し、「ユタの介在」による「ハナシの生成」のダイナミズムを総括する。

以上、本書の内容を各章の論旨にそつて紹介したのであるが、果してそれが当を得たものとなつてゐるかどうかは、いささか心許ないことである。およそ各章の多くは、詳細な民族誌的記述をもつて始め、説話を伝承するシマ社会の内面を洞察し、文献・口承にわたる資料を網羅して検討しつつ、説話生成のダインミズムに迫るという方法によつており、その論攷を読解するには、いささかの忍耐が

の伝承がなされるようになつていく」と説く。

第九章は、八重山・竹富島における六御嶽

本書の副タイトルへユタ・英雄・祭儀の中心となる波座間御嶽の祭神・根原金殿にかかわる説話の生成を論究する。その根原金殿は、農業神として「粟の主」とも考えられてい

ているが、金殿と称されるごとく鍛冶神と推され、いわゆる鉄人童子の説話を有している。

しかししてその鉄人童子譚は、波座間御嶽を祀るトヌイムト（祭神直系の元屋）の根原家に生じた事件を契機に、ユタの託宣を通して再生成され、ユタの教示によつて伝承が確認されるという、説話生成のダイナミズムを明らめる。

第十章は、第一章から第九章に及んだ論考を補促し、「ユタの介在」による「ハナシの生成」のダイナミズムを総括する。

以上、本書の内容を各章の論旨にそつて紹介したのであるが、果してそれが当を得たものとなつてゐるかどうかは、いささか心許ないことである。およそ各章の多くは、詳細な民族誌的記述をもつて始め、説話を伝承するシマ社会の内面を洞察し、文献・口承にわたる資料を網羅して検討しつつ、説話生成のダインミズムに迫るという方法によつており、その論攷を読解するには、いささかの忍耐が

要求されるものであつた。また各章の論述は、と思われる。言うまでもなく、ユタの活動はキーワードをもつとは言え、取り扱われる説話によって、それが必ずしも一様に相関させて論究されるものとはなつていない。対象とする説話が、それぞれ独自なものであれば、それは当然とすべきであろうが、それが本書全体の論旨の一貫性をそこなわせていることもも否定できない。そしてそれは、本書に収められた論攷が、多くそれぞれのテーマを持つ論集などに寄稿されたのであり、本書においては、そのややテーマの違う論攷が南島の北から南に及ぶ地域分けによつて配列されていることが、かかる印象をもたせるものとなつたものと察せられる。

それにもかかわらず、南島におけるシマの生活・祭儀・信仰のなかで、現在性をもつて説話が生成されるという著者の論証は、大いなる銘をいだかせるものであつた。そしてそれは南島に「ある」とをもつ著者ならではの到達し得ぬ独創的な論攷と言わねばならぬ。しかしあえて、その著者の説かれる現在性をとりあげるならば、それは著者の関心が特めなければならないということであろうか。シマの精神生活を支えるユタの活動に傾注されるときには、著者が説話の始原義づけられるものである。著者が説話の始原（発生・成立）に関心を示しないことも、これと関係があろう。したがつて著者の説かれる説話が、多くは現在性に至る説話の再生成のことのように思われる。これまでの南島研究が、始原の追求に費されたことで、それと並んで、本書の獨創性はその現在性の追求にこそ存するのであるが、説話の生成が、時間軸を見据えて論究すべきことも否定できないであろう。

その論攷を読解するには、いささかの忍耐が

されるときには、いささかの忍耐が

（第一書房 A5版 五九四頁 八〇〇円）

（ふくだ・あきら／立命館大学）